

今月のみことば 2018年6月

「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない。」(出エジプト記20章16節)

「律法」と聞くと、どこことなく硬く、冷ややかなイメージが伝わってくる。それを守らなければ罰を受ける、というイメージが伴うからであろう。

ところが数年前、東京の広尾にあるユダヤ教シナゴグの安息日礼拝に参加して、その先入観が打ち砕かれた。会堂正面の戸棚からラビ(ユダヤ教の師)が、律法、つまりモーセ五書(トーラー)の大きな巻物を取り出して男の子たちに渡すと、子どもたちは楽しそうにスキップしながら、会堂内の通路を「トラ、トラ、トーラー、トーラ、トラ」と歌いながら練り歩くではないか。最後には巻物がラビの手に渡されて礼拝が始まり、ラビの朗読へと移る。それも単なる朗読ではなく、美しい音楽を聞いているかのような朗唱であった。



調べてみると「トーラー」とは「教え」という意味が基本で、規則によって人をがんじがらめに縛るもの、というのではなく、父親が愛と権威をもって子どもを教え導くイメージがある。だからこそ、ユダヤ民族にとって、数千年にわたる精神的な支柱となり続けたのかもしれない。

「トーラー」がそれほど慕わしいものである、という背景がわかってくると、そこに含まれている十戒の印象も大きく変わる。それは本来、人を処罰するためのものではなく、真の意味で人を幸せにするものなのだ。

例えば、第四戒の「安息日(今日の土曜日にあたる)を覚えて、これを聖なるものとせよ」という戒めを本当に守っていたら、過労死などないはずである。安息日にまで仕事をする者、また仕事をさせる者は死を覚悟しなければならないほど、この戒めは厳粛に受け止められた。もし日本でこの第四戒が厳守されたら、どれほど多くの人が命を失わずにすんだことであろう。

また、第五戒の「あなたの父と母を敬え」ということがまじめに受け止められたら、機能不全の家庭は激減していたのではないだろうか。もちろん、子どもに対して威張ることを奨励しているわけではない。また子どもの側から見て敬えない、という親もいるかもしれない。しかし、ここで「敬う」というのは、感情のことでなく、「重んじる」という意志と行動のことを言っている。それがわかった時、親との関係が癒やされた経験を私は持っている。

特に最近、「偽証してはならない」(第九戒)が身近な問題に感じられるのではないだろうか。知らないわけがないのに「記憶にありません」を連発する官僚や政治家に、国民はうんざりしている。責任が追求される証人喚問には応じないが、訴追の恐れがない参考人招致には応ずる、という姿勢自体、初めから真実を言う気持ちがないことを暴露している。

十戒は、まさにこれを尊び、喜んで受け入れるなら、人の社会に幸福と安全と繁栄をもたらすものばかりである。しかし、だからといって、自分がなぜ十戒を受け入れなければならないのか、と問う人もいるであろう。その答えは第一戒、「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」にある。

つまり、律法は、あなたを、そして私を創造した神のご命令でありご意志だから従うべきなのである。すべての法律と同じく、もしこれを踏みにじるなら、私たちは不幸と悲しみという罪の結果を刈り取らなければならない。だからこそ、律法を完璧に守られた唯一の御方、イエス・キリストを救い主と信じ受け入れて、罪と違反を神の前に赦していただく必要があるのである。